

小林 874^P 文記(中) 大 18^P 後人伝を読む 84^P 小林 781^P 断髪 断髪 断髪
 1.826^P まつり 11 林 703^P 史記(生) 大 461^P 後人伝を読む 80^P 奉守とある
 小林 299^P 序・中

風俗・習慣・文字・他

断髪・文身・黒歯等
 倭国の貴人の風習

夏(か)の始祖

夏(か)王朝第六代

史記(中) 越王勾踐 其の先(祖)には、
 夏(か)の帝少康の庶子なり。会稽に封ぜら

れ、夏(か)の帝少康の庶子なり。会稽に封ぜら
 草萊を披きて、邑をつくる。文身・断髪し、

とあり、(身体)の入墨(と)切りつめた髪(と)
 か、特に目立つ越族の生活風俗であつたよう

である。

越(えつ)の風習は、
 華(か)夏の民の目に異様に見えたのであ

う。
 史記(中) 越世家 には、

断髪して、文身し、臂に錯し、左衽する
 衣服を左前にするは、越(えつ)の民なりし

とある。
 相手から見て左の衽を上にして衣服を着ること

断髪

576^{p-2} 1834^{p-2} 1829^{1/5} 1776^{1/8} 590^p 1,827^p 600^p ~ 612^p 東臨王 596^p 2310^p 1515^p せんぱつ たか27 1779^p 髪髪の毛を切ること。

「翦髪」は、髪かみの毛けを切きることである。
 こにいう「錯臂さくへい」を、「腕うでを組くむ」と
 と解かいする者ものもいるか、口史くし記き索さく隱いんによは
 「錯臂さくへい」も亦また、文身ぶんしんなり、丹青たんせいを以もつて其身そのみに
 錯画さくがするのを謂いうとあつて、腕うでにも
 いれずみがあり、それには赤色や青色が用い
 られてゐたという意味になる。
 また、「甌越おうえつの民たみ」とあるので、越族えつぞくにつ
 の説明せつめいのようにも思おもえるが、
 越えつ「繇王ようおうの（閩いん）越えつ」「餘善よぜんの東越とうえつ」とい
 たる呉国の流ながれさくむ國くにの民たみのこを指さし
 ている可能性があらう。（第六章へ閩越いんえつ地
 方の教勅けうしつの歴史の項参照）（通常）
 さらに我が国の古墳時代の埴輪はにわを見みると、貴
 人達は男も女も、左社さいじん（衣服いふくを左前ひだりまえ）にして
 着きてゐたことが分かる。（既述）（趙世家ちうせいか）において先
 引ひききつぎて呉の國（前四七三年に滅亡）の風俗
 習慣しゅうかんを次のように述べている。
 「黒齒くしして、題たい（額ひたい）に彫ちやうし、卻冠きやくかん紱ふ紼ふつす

大カニ 2443 小カニ 1062 大カニ 2443 小カニ 1062 大カニ 2385 小カニ 1062

大カニ 1779 大カニ 1832

由 1830-1/2 林 715P
1649 林 756

卻 漢和 983P
林 715P

1.8.28P

きやく 却 174P
林 715P

しかり 大論 漢解

後人伝を説く 84P
由 1830-1/2 大論 238P

72037P

大略 503P

1049P

るは大呉の国なりし

と いう。歯を黒く染める「おはぐろ」についで、
史

記集解には、草で染める、としてゐる。

また、「題」とは額のことであり、
雕す

とはいれ、すみをすることであるから、額に

れず、みをして、いたうかへる。「倭人伝を

読む」森浩一、中公新書、八四、八五頁参

照

定かでないが、「卻冠林結」の意味はもう一つ

「りぞく」とは、「卻」(上を向く)と

の誤りであつて、

「卻冠」(上を向いた冠を着用すること)と

林結(林は長い針、結は縫うこと)の風習が

あつた。

の「はな」な

「住古」の

あるは、呉国の人々は、

(1) 黒歯(草で染めたおはぐろ)をし、

(2) 額に入墨をし、

(3) 上に立ちあがった冠を着用し、

地下 957P
凡折鳥 399P

ニ 200P
572P

タイW

1.829P-1/7

左社 1993P-1/2 1999

えす
1375

(4) 畳針のような長い針を用いていた、
というところなのかも知れない。
＊
ともあれ、大海によって隔絶されており、
時代もまた大きく異なっているとはいえない。
このように、呉国、越国の風習とは、極めてよく似ている。
倭国、越国の風習とは、極めてよく似ている。
先ず、埴輪の男子像の冠を見ても、その
形状は実にさまざまなかから、皆上の方へ
立ちあがっており、折れ曲った帽子（後
代、地下に着用した風折鳥帽状のもの）は見
られな（写真版）（参照）
・八弥生時代の貴人達も、埴輪にみられる冠
とほぼ同様の、上へ向かって立ちあがった冠をか
ぶっていたのであろう。

いげエ P
蘭草 571
能本用の大史部 142
千丁 586 の 1 地 回
つめ 冷たい 1502
エ 1502

1.829 P-2
1829 P-2
蘭草 571
能本 19-342

572 P
蘭草 571
能本 19-342
851 P
756

と想像される。
「朝日新聞」平成十五年七月三日付へ「もん・ドラえもん」
（置針のような長い針）
置表や墓座に用いる日蘭草は、温帯地方
に広く自生する宿根性草本である。これを栽
培しているのは日本・中国・朝鮮のみであり
なかでも日本の生産は最も多く、その品質も
また優れている。熊本が主産地で、全国生産
高の約半数を産し、岡山・福岡が次に次ぐ。
山口・石川・熊本・静岡などでも作られている。
（世界大百科事典「平凡社」へ「蘭」へ「置表」へ参照）
春から夏にかけての八代平野では、いたる
ところ青々とした蘭草の波が目にはえ
る。前年の暮れに氷のように冷たいなかで
蘭田植えされた蘭草は、七月中旬から下
旬にかけて刈り取り期を迎える。
（八代駅の北三
角）
なお、蘭草といえは八代平野の千丁町が有
名だが、この地の蘭草栽培は、室町時代後期の
正二年、興善寺城の城代相良伊勢守の与力
山崎主馬忠久が、千丁村に植えさせたのには

出版社、一四二頁参照）
能本県の歴史散歩
山川

図なるほど、弥生時代に八代平野で
 栽培されたイタカと、
 稲の栽培は、
 縄文時代から
 弥生時代
 にかけて
 行われていた
 と考えられる

① 恋しく
弥生時
すで
に
八代平野
で
薨が

栽培
さへ
て
いた
の
あ
う
う
、

② 1765年の一五〇五年、干拓地である千

丁村に、蘭草が移し植えられたのであろう、

と考へてみた
ハ代海王拓
五訂版の東京日本書院ハ九二頁参照

古事記こじや万葉集まんやふしにには菅すげ置おき皮かわ置おき絹きぬ置おき萱かき

疊などが見え、景行紀十七年条には疊窟とある。

また、天武紀十年八月二十日条には、
をねのしま ^{うきまが}くちなし かま

多量の農産物に支子と炭子（藜）がある

と
は
へ
ら
水
て
い
る
ゆ
か
う
え
た
の
あ

畳は日本の住宅の床の上に敷くもの。で、畳

で
作
た
床
の
上
に
座
で
編
た
表
を
つ
け
る
帳

も
后
夏
延喜式
に
に
長帖
短帖
狭帖
な
と

か
あり
身分
によって
大きな
差が
ある
うす
い

[illegible]

聚籍要抄
に
よ
水
は
今日
と
月
に
特
度
の
厚
さ

た
と
う
世界大百科事典
平凡

写真図版

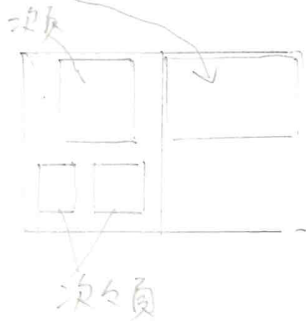
312

315



1829-4/7

- ・ カラー
- ・ 右頁の上半分に、
限度一杯はみ
出させて
掲載下さい。



カット
↓

13AQ 中心ふりかけ

『きみ ぶみかえ』

『貴一蘇水』
長いバツン

14AQ

『から』

『藁』

写真図版 3/2 藁田 (藁を植える田) での藁 (藁草) 刈り

『はく にんねん』

『藁とイグサと職人技』

伝統技法研究会

2008年9月1日発行

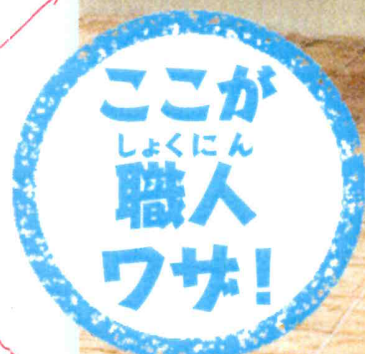
口絵参照

687^P

687^P

- ・カウー
- ・左頁の上半分に、
上へ入大主
はみ出に掲載
下さい。

(左端) 縦方向のブルーをトル



あつ たみ した
ぶ厚い畳の下から、
ねらった所^{ところ}にぴった
りと針^{はり}をさす!



1489 写真図版 313 はり さ
針を刺す
688

針を、もう少し
シャープにお願い
します。

2. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840.



中心及び力付
13QG

辨字

1829^D - 6/7



14AG

針がボンヤリしている。もう少しくっきり見えるように
お願いします。(親指と人さし指とで持っている針)

$$= 572$$

1719⁸

白膠木

社、へ置（参照）

へ倭人達は、長い針を用いていたの（だ）らう

と想像される。

さらに、倭人たちが九州（肥後地方）から

東国へ移住したのであれば、其墓置表

へ藺草（たまたみ）置針もまた、九州（肥後地方）

から各地へ（たまたみ）広がっていったのであ（だ）らう

と推察される。

御歯黒（おはぐろ）

御歯黒（おはぐろ）（鉄將水ともいう）につい

てみてみよう。

おはぐろは女房詞で、歯を黒く染める

ことをいう。鉄片を茶の汁または酢の中に浸

して酸化させた褐色・悪臭の液（たまたみ）がねに、

ふいのこをつけて、歯を黒くするのである。

なお、

ふい（ふい）（付子・附子・五倍子などと書く）

は又ルデの若芽・若葉などに一種のアブラ

「いさよう」
次頁

天つき
改行

ふさろ
葉 1931

1,830^P-1/2

ぬるで
云 1719

ふいのニ
云 1935

ちかうえ
虫 1439
絨毛 1055

こびえ
瘤 825
あひる 1326
あひる 17, おびる
岩青色

ムシが寄生し、その刺激によつて生じた瘤状
の虫癭（虫こぶ）のことで、紡錘形をしてお
り、内部は空洞、皮壁は帯黄褐色の絨毛（柔
突起）を被る。その粉を、婦人が歯を黒く染
めるのに用いた。
という。
また、
「ヌルデ（白膠木）は、ウルシ科の落葉小
喬木であつて、東南アジアに広く分布し、我
国の山地にも普通に見られる。高さ約六
葉は三つ六対の羽状複葉で、小葉間には翼が
あり、秋に紅葉。しばしば葉に生ずる囊状の
虫癭（虫こぶ）を、五倍子と称する。
という。
つまり、
「倭国の婦人は、歯を、植物で染めていた
といえよう。（先述の「史記集解」参照）
口おはぐろ口は、古く上流婦人の間で行なわ
れ、白河院頃から公卿など男子も行ない、のち
民間にも流行して、室町時代には女子九歳の

次頁から

F4/16
4/16

1,830^P - 2/2

ひやちちやう
おはあちやんか
おはやろをいって。 1858 70^P.73^P

おはぐろ 317^P

頃ころに水みづを成年せいねんの印いんといした。江戸時代えどじだいには結むす婚こん
した婦おんな人のすべすべてが行おこなななたたという。へ「広辞こうじ
苑えん」へ御ご歯は黒くろへふしへ白しろ膠かろう木ぎへ参ま照しょう
また樋ひ口ぐち一いち葉えふの口ぐちたけくらべへ明治二
十八年じゅうはちねんの作さくに、
「お歯はぐろぐろ溝ぞうに灯とも火ひうつる三階さんかいの騒さわぎも手て
に取とる如ごとく、云々云々
とある。
そして、「おはぐろ」は、最近さいきん(第二次世
界大戦終結頃)迄、ごく普通ふつうに見みられられた風習ふうしゅう
でああった。
すなわち、
へ呉国ここくの風俗ふうぞくの一つでああった。おはぐろ口
は、古ふるく倭国わこくの上流婦人じやうりゆうふじんたちの間あいだで行おこな
なれ、さらに現代げんだいにまでも受うけ継つがれれてき
た。
というところなのであろうかと思おもわれれる。

こうえい
後(高)元27⁹

新 473
400
73

1.831^P

元并
墨子 2030⁹

see!
⑤576-7/2

いれみ
入墨元157⁹
⑤576-7/2

前頁

額の入墨 (二つの点)
つづいて、額の入れずみとマシメて
みよう。
中国、戦国時代(前四〇三と前二二一)の
初期の思想家である墨子(前四八〇頃と前三
九〇頃)が、
南方異民族の蛮族の中には、額に文身し
て、火食しないものがあつた
と述べている。(「中国のあけぼの」貝塚茂
樹、河出書房、三四頁参照)
呉国の滅亡は前四七三年。越国の滅亡は前
三三四年である。
つまり、戦国時代初期(前四〇〇年頃)と
いえば、呉国が滅んでから七十年程たった頃
のことであり、越国は未だ存続してりた
のだった。
あるは墨子は、――――呉国が滅んだの
ち、武夷山の山中に落ちのびて辛政の時を過
ごしている太伯の後裔達の有様を書きとめたの

元行 389⁺
阿尾 286⁺

① 1765^{P-1/2}

1.832^P

ゆ
姑す^P
元 2257

天つき
改行

魏文海 45^P 80^P (年文)
84^P

① 1765^{P-1/2}

1868⁺

であううか。
彼等は、古き良き吳国の風習を堅持！
額に文身（二つの実であつたうか）を、
また、火食せず、
習慣をもつていたのかも知れない。
尚、
魏志倭人伝に、「倭地温暖。冬夏食生菜。
後漢書倭伝に、「土気温暖、冬夏生菜茹し
とあつて、倭国の着連に生菜を茹
でたものを食べる習慣があつたようである。
恐らく倭国の支配階級の着連に生菜を食
する風習があつた。朝鮮半島から渡
来した一般庶民に火食する風習があつた
のであうう、と想像される。（第二十七章の
冒頭において既述）
ところで
神楽に用いられる神楽面には、
素盞鳴尊・日本武尊・天狗・阿亀・ひよと
こ等が有り、民間の神社で神を祭るときに用
いられてゐる。「広辞苑」へかぐらへか
ぐらめん（参照）

④ 1834-1/2

1833^P

- ・ カラー
- ・ 頁の上半分に掲載下さい。



130G

140G

写真図版 3/6 神楽面

大正、かぐらめん

『神々の里』バのふるさとをとりめて日本発見20、 暁教育図書(株) 昭和56年2月1日発行、 142頁参照。

130G

たかま

てんほう

えん

高眉(殿上眉)が描かれている。

695

内裏雛 1352P

576-2/1.834P-1/4

ほとと 2045P
施す 1827P
行う 576

「延く」市 1832P 576-2/2
「グラビヤ版」
大きな紙 389

■ それにしても、素交鳴命や阿亀などを示す
神楽面の顔を見ると、(男女の別なく)ふたつ
並らびの円点が描かれており、この二
つの点が、小点ながら極めて印象深い特徴と
なっている。(写真図版 316 参照)
里ハ(20) 暁教育図書、一四二頁、日神楽ハ参照
■ 多分、
ハ吳国の人々の口題(額)に雕するハ風習
を殆んどそのまま受け継いで、
倭国の貴人達は、男も女も、額にハ文な二つ
の円点の入水墨をほりつけていたのであらう
と推測される。
* もつともいつの頃からか、
円点を描くようになったと解される。(広辞苑ハ殿上眉ハ高眉ハ他参照)
■ 三月三日の雛祭りに飾る日内裏雛ハは、天
皇・皇后の姿をかたどって作った一揃いの雛
人形である。(「広辞苑」ハ内裏雛ハ参照)
■ この雛人形ハ「お内裏様」と「お雛様」の
顔を見ると、眉毛の上方に二つの鼻が描かれ
ていりる。
■ このような二つの鼻は、大伯の後と貴族のいりる
自称する

タイム⑥ 2207°
 ⑥ 2216°
 1,834-
 ⑥ 2216°
 ⑥ 1827°

の名残りなのであろう。

また、後近年描かれたものと思われ

るが、日本歴代の女帝（皇極天皇・持統天皇

・孝謙天皇・後桜町天皇）の絵姿を見ると、

額に二つの円突があつて、―――吳国の口題

（額）に雕するは伝統が、実に、我國の江戸

時代にまでも継承されてきたことを思わせる。

（「皇室大百科」塩田勝、朝日通信社、二〇

五〇二七五頁参照）

なお、「阿亀」の額には二つの円点を描か

れるものの「ひよつとこ」の額に二つの円

点を描かれることはなによりである。

＊「おかめ」・「ひよつとこ」について、

追つて述べることにしたい。第三十四章

へ「懐妊の儀式」の項において、思うところを

述べたい

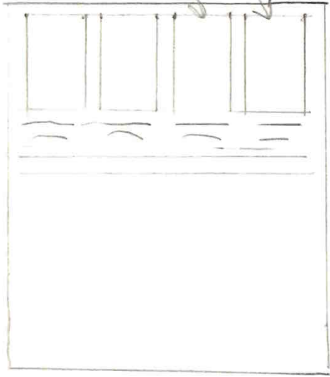
■そして現在も神社祭りの際、額に黒い円

点を描く例は多い

1656

頁の右上に、
できるだけ大きく
掲載下さい。

女帝4葉を均等に配置
してほしい。



いとう
持統天皇

女帝 (645~702)



こうぎょく
皇極天皇

女帝 (594~661)

1464 第296図 日本歴代の女帝 (額に二つの円点が描かれている)

1364

『皇室大百科』朝日通信社、昭和50年3月10日発行、205^P、210^P、214^P、275頁参照、698^P

1,834^p-4/4

頁の左上に、
できるだけ大きく
掲載下さい。



こゝろまち
後桜町天皇
女帝 (1740~1813)



こうけん
孝謙天皇
女帝 (718~770)

北九州山口地方

倭国の一般庶民の文身

倭国の一般庶民は、鰥面（顔に入墨）し、また文身（身体に入墨する）し

ていたようである。

魏志倭人伝に

「男子は大小と無く、皆鰥面文身す。古より以来、其の使中國に詣るや、皆自ら大夫と称す。夏后小康の子、会稽に封せられ、断髪文身、以つて蛟龍の害を避く。今倭の水人、

（まだ龍とならぬ蛟）

好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し亦以つて大魚・水禽を厭う。後稍々以つて飾りと爲す。諸國の文身各々異り、或は左にし或は右にし或は大に或は小に、尊卑差有リ

と記されてゐる。

魏略逸文（翰苑卷三〇）には、

「其俗男子皆黥面而文。聞其舊語、自謂太伯之後。昔夏后小康之子、封於會稽、断髪文身以避蛟龍之害。今倭人亦文身、以厭水害也」

とある。（「岩波文庫」四三七〇、九二頁）

③後漢書倭伝に、「男子皆黥面文身、以厭其文左右大小別尊卑差」
④晋書卷九七・四夷伝・倭人条に、「男子無大小一悉黥面文身」

夏后小康 魏志倭 92P
新刊(1) 53P

1.835-1/4
夏后の禹 魏 43P
1826 3800 4568

こと こと
考 20号 38P
1768-1/3 38012

1979P

かき 小鉢
飾り 1071P

ほど216 ... ⑤ 1834-1/2
2次夏1919 131

1,835-2/4

魏志倭43
前頁135行

魏志倭72P末3行

5

また、隋書倭国伝には、

「男女多く臂（うで）に黥し、面に點し、

身に文し、水に没して魚を捕う」とある。

とある。

「かゝる所に、魏志倭人伝の、

「諸国の文身各々異り、或は左にし或は右

にし、或は大に或は小に、一に一に、

という記述は、なんとも異様である。

ただたんに、

八倭国内の国毎に、伝統的に、身体への入

墨の模様が違う

というたふうには解し難いように思われる。

「かゝる」として

貴人であることを示すために額に二つ並ら

べて點した征服者達倭人達は、北九州・山地方に住

む先住民達の身体に、いわば強制的に、諸国

毎に異なる左右大小まちまちの入墨を、目印

として割り付けさせた

のではなからうか。

そして、「諸国の文身各々異なり」とある

昭和1787 1,835^{P-3}

（こ）

全世
全世 名1269 「全て」 頁
下は各定を伴って
全て、

ところから推察すると、
へ倭国の庶民は、肌を露出して身体の入墨
を人目にさらすことに、全然抵抗感を持って
いなかっただけ。
と、いえるように思える。
倭国の諸国の一般庶民の男達が、衣服を脱
ぎ捨て、禪一つで作業する。ことは、日常的な
ことだったのか、知らない。
そう、たわけで、梯偶は、行く先々の諸国
において、
「其の風俗淫ならず。庶民の男子は皆
（冠をかぶらず）露糸（むき出し）に、髪を
結ぶことし、木綿を以って頭に招け、其の
束（たば）と相連ね、略々縫うこと無し」と想像
といつた状況を、目にしたのであろう、と想像
さる。（第二章へ庶民の服装の項参照）
梯偶は、
へ倭国内諸国の男達が、入墨をほとんどし
身体に禪を締めただけの裸の姿を人前に晒し

人々の見る前
大衆の前

名905
同に所
いるよう
す。

（こ）

（こ）

1,835^P-4/4

5月 期 席に23人頭
1人とうせ

てすニ一も気にする様子か
というあまりにも平然とした態度に
張つて驚いたのではなからうか。
目を見

*

後国の支配者達は
へ左右大小バラバラの入墨

を庶人に強制したのだらうか。

道に迷った者を
犯罪者の身元確認を容易にし

寧秩序を保ったため
租庸調(年貢・人頭税)など

率的に得る為で
更状は分からない。

等々考えられるが

1,836^P 1/7

公許苑
(はて)

④ なお、現在も、幾分似ている例がある。

① 印半纏

13.5^{cm} 襟・背・腰回りなど、屋号・氏名などの

の標識を染め抜いた半纏で、主に木綿製で職人の

の間で用い、また、雇主が使用人や出入りの

者に支給して着用させる。法被の類(広辞苑参

照)

② だらりの帯(写真図版 317 参照)

13.5^{cm} だらりの帯のいちばん下の部分には、置

屋(芸娼妓を抱えておく家や自分の家で客

を遊ばせたり、揚屋・茶屋からの注文に応じ

て芸娼妓をさしむける)の紋がある。

・だらりの帯の紋を見れば、どの置屋の者な

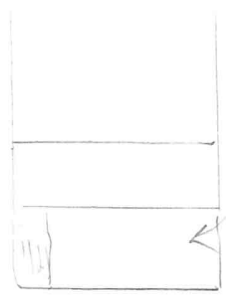
のかか、分かるわけである。(「京都五花街」溝縁

ひろし) 光村推古書院 平成二十二年十二月十日発行 七頁参照

③ 制服・制帽・ユニフォームの類

・カラー

・右側の右端。
・はみ出しせ、
縦長に配置して
下さい。



1,836^p - 2/7

(☐ 状部)
まわりの黒色を追加して下さい。



斜めの線を
入れて

中心のわかれ
13Q4

こまかい
おびの
おびの

14Q4

京都五花街 華縁ひろ
12Q4
・だらりの帯の下端には、

写真図版 3/7 舞妓さんの "だらり" 帯

光村推古書院 平成22年12月18日発行、カバー折込178頁参照
置きや 紋が 入る

一つは、禪をーているので、裸になるとい
 うことにこだわらなかつたのであろう。禪は
 着衣のうち、と考えられていたからなのではな
 今日も相撲取たちは裸体に禪を締めており
 それを見る我々も裸に~~な~~はるの
 違和感を感じない。
 このように、日本の民衆は古くは裸を好人
 だ。そして、それは明治三十年当時まで続い
 た。
 そのころまでの日本に關しての外国人の見
 因みに述べると、
 「中国人や朝鮮人は裸になるのを嫌うけ
 ども、日本には暑いとすぐ裸になる風習があ
 った。

1836⁷-4/7

ニト

写件

1836⁷-7/55⁷

ニト

HIV

HIV

聞録を讀むと、多くそのことに触れている。

男は禪姿の裸のまま屋外で行動する

場合も多かった。

そしてまた、夜間、裸のまま布団に入

って寝るといふ習俗も、ほぼ全国に及んで

たようである。

明治三十二年、外国との不平等条約が廃止

されて平等条約が結ばれ、それまで居留地

と称する一定の区域の中に住んでいた外国人

が日本全国どこに住んでもよいことになった

時、裸体の習俗は厳しく禁止され、裸形のま

ま屋外で行動する者はほとんどいなくなっ

た。

という。『日本庶民生活誌』宮本常一、中

央公論社、昭和五十八年五月十日（三版）

行、三八頁、一一五頁参照。

① 察するところ、倭人達は

① 倭国大乱以降、北九州・山口地方の庶

民（縄文人の子孫・南方系身人の子孫・扶

余系般民の子孫・当和の弥生人の子孫・箕子

1836^P-5/9

の子孫らゝを區別せず、同一視して、
全ての種族の男達に禪を着けさせた。

② 一かゝ中国・近畿地方などを平定した直
後には、^{はるばる}広大な地域に任んでいるさまざ

まな種族を出身地ごとに識別する必要性が無
かつたからだろうか。倭人は、^{たおひ}下帯の強制を行なわな

かつたようである。

(1) 扶余系殷民の子孫等は、昔なからの禪を締

めていたに、^{ふん}禪に類するものを身につけて

いなかつた、

七章へ口拘奴国^{ふん}の禪^{ふん}（他参照）
第二十

③ もつとも、その後、いつか不明ながら、
貴族達は、庶民の男達全てに、禪の着

用を義務付けたのかも知れない。
へそこで日本人は、^{あつ}暑いと、すぐ裸

になるようになった。
のではなからうかとも思われるが、定かでない

1836^P-6/7
-11.16.3.7④-

④ 1836^P-4/7
4行へ

11¹⁰

② なお、

「夜間、まっ裸のまま布団へ入って寝ると

いう習俗も、ほぼ全国に及んでいたようである」

という。『日本庶民生活誌』宮本常一、中央公論社、昭和

辛酉年五月十日（三版）発行、三八頁参照」

・一般庶民（各種族）が「もともとから、このよ

うな風習を持っていた可能性はある。

・「かし、確証は無いものの、

「裸で寝させるに限る」

という支配者層の思惑（強い意向）があった

からなのかも知れない。

① 富国強兵策を押し進める為には、先ず、何

とiffても、子供を殖やす必要があった。

② また、

「裸で寝て、夫婦の交わる機会が増し、

各家庭が円満であれば、国家も安定す

る✓

H30(2018)5.7(月)~5.8(4回)
令和2(2020)1.25(土)~1.25(3回)

1,836^P-7/7

詳しくは分からない 1837^P-1/6 末

H16.5.29(土)

下 1/25
1/25

ことだろう。

な処罰の有様は下見る人々を震えあがらせた

・翌日の朝、村人全員の前で行なわれる苛酷

を確認していったのだろうか。

・裸で寝ているかどうか。

中へ押入る。

・時折り、役人や村長などが、松明を反かに

点し、寝入ったところを見計らって、各小屋の

は不明である。

・庶民のその憤り、途かな時を経て、近年に

至るまで続いてきたようにも思われるが、詳細

というところが、執拗なまでに強制され、

・すなわち、上からの命令によって、

裸で寝る。

・という思想があつたのだろうか。

は国家も円く治まる。

・夫婦仲円満、家庭平穏、人口増加、

と考へられたのではなからうか。